

朝鮮半島における近代都市図作成の展開

—朝鮮全図に掲載されたソウル都市図を中心に—

渋谷 鎮 明

- I. はじめに
- II. 朝鮮半島における近代都市図作成の展開
—ソウルを例に—
 - (1) ソウル近代都市図のおおまかな類型
 - (2) ソウル都市図作成の展開と転換点
- III. 日本における初期朝鮮全図の作成と古地図からの情報
- IV. 朝鮮全図に掲載されたソウル地図—初期の都市図とその変化
 - (1) 朝鮮全図に掲載された初期のソウル都市図
 - (2) 韓国併合までのソウル都市図の変化
- V. おわりに

I. はじめに

朝鮮半島においては、旧韓末より植民地期にかけて、すでに多くの都市図が作成されていた。これらの地図は次第に測量に基づいて作られた「近代的」な地図に変化し、盛り込まれる内容が増加し、その種類も多彩になっていく。またこの時期の都市図は日本人の手によって作成されたものが多く、上記のような変化には日本人が深くかかわっているものと考えられる。特に民間作成の都市図は韓国併合(1910年)以前のかかなり早い時期から、日本人の手によって作成されており、時代が下るに従って、観光案内や地番入地図などを含むかなり多様な都市図が作成された。

しかしながら、地形図などと異なり、民間作成のものを多く含む近代都市図の場合、少なくともこれまで韓国においては、どのような地図がどれだけ存在し、どこに所蔵されているかなど、その全体像を把握するのは困難であった。しかし近年、韓国の一部の博物館においてかなり集中的な収集作業や解題作成が行われつつある¹⁾。

このような作業を通じ、今後韓国においてはこれらの地図を用いた研究が進展するものと考えられる。これらの地図は、当時の朝鮮半島における都市の姿や構造を探るための資料となることはもちろん、他の資料と併用することで当時の社会を知るための基礎資料ともなるであろう。また地図によっては、それ自体を分析することで、その表現手法の変化や、作成主体の意識などに言及することも可能と思われる。しかし朝鮮半島の近代都市図に限るならば、まだそのような研究は少ない。

ところで、朝鮮半島の都市図は、半島全図に割図として挿入された都市図まで含めるならば、日本人の手による地形図作成のための秘密測量が始まった1895年よりも早い時期から作成されている。このことは、近代的測量に基づく地図がないか、それが十分に普及していない時期に、都市図が作成されていることを示している。この際に情報の少なさから朝鮮王朝期に作成された古地図が利用された

キーワード：朝鮮半島, ソウル, 近代都市図, 古地図, 大東輿地図

ことも考えられ、近代都市図と古地図の接点
がみられるのではないかと推察される。

本研究では、主として民間作成のソウル都
市図について、その特性および時代的变化
をおおまかに把握した上で、特に韓国併合
(1910年)前後までに作成された初期の都市
図の展開に焦点をあて、その後の変化につ
いて明らかにしたい。またこの時期は上記の
ように、日本人により作成され日本で発行さ
れた朝鮮半島の地図がきわめて多く作成さ
れており、近代的測量が十分に行われてい
ない時期でもあり、日本人が朝鮮半島の地
理情報を得ていく過程についても考察した
い。

II. 朝鮮半島における近代都市図作成の展開 —ソウルを例に—

(1) ソウル近代都市図のおおまかな類型

上述のように、民間作成のものを多く含む
近代都市図は、その種類や所蔵などに関して
全容がはっきりしないが、ソウルに関しては
近年博物館で収集した都市図の図録がまとめ
られ、その全貌が明らかになりつつある。そ
の反面、ソウル以外の地方都市についてはま
だ不明な部分が多い。これは、旧韓末に開港
し、植民地期においても都市規模が拡大した
釜山などの重要な地方都市においても同様で
ある。本章では、比較的資料の整理が進んで
いるソウルを例として、朝鮮半島の近代都市
図について整理検討し、そのおおまかな全体
像の把握に努めたい。

ソウルは、かつて漢陽と呼ばれ、朝鮮王朝
600年間を通じた国都であったため、王の居
所である王宮や王朝の重要な機関がおかれ、
名実ともに朝鮮半島の中心であった。そのた
め、朝鮮王朝時代から国都であるソウルを描
いた古地図が多く作成されていた。またその
後朝鮮半島は、日本・清・ロシアを中心とす
る外来勢力による争いの場となり、日清・日
露戦争を経て次第に日本が朝鮮半島を支配し

ていく。本稿で扱うソウルの都市図はこの時
期に作成されはじめている。なおこの時期は
ソウルについて、朝鮮時代の正式名称であっ
た漢陽のほか、漢城、京城などの呼称が用い
られ、韓国併合後には「京城」で統一されて
いく。

上述のように、ソウルの都市図に関して
は、2004年にソウル市立大学博物館に所蔵さ
れるソウルのもを含む近代地図の特別展が
行われ、その際に『近代地図特別展 地の痕
跡、地図の話』が刊行された²⁾。またソウル
歴史博物館に所蔵された近代都市図を中心と
した図録、『ソウル地図』が2006年に刊行さ
れ³⁾、博物館が所蔵する多種多様な近代都市
図の存在が明らかになり、次第に全体像が理
解されつつある。表1はこれらの情報に筆者
の調査を加えて作成した、一枚もののソウル
近代都市図のリストである。もちろんこれが
ソウル近代都市図の全てではないが、およ
その都市図作成の展開が理解されるのでは
ないかと考えられる。まずこの表をもとに、
地図をいくつかの類型にまとめながらその流
れを追ってみると、以下のとおりである。

まず表1には1910年以前に作成されている
都市図がいくつか存在している。1910年の韓
国併合以前には、日本による秘密測量は行わ
れていたものの公式には地形図は存在して
おらず、また併合後に実施される土地調査の
成果も利用できない状況であったはずなので、
これらの地図は公式ではない情報を利用して
作成されたものと推察される。これらを代表
するものとして1903年発行の「韓国京城全
図」(1903年、京釜鉄道株式会社)や、「京城
市街全図」(1909年、青木恒三郎)などがあ
げられる。これらの地図は、精度はどうあれ
縮尺が記入されており、何らかの近代的測
量を行ったか、その情報を利用したものと推
察される。また、ソウルの城壁の形態や地物
間の距離が現在の地図とはやや異っており、
測量やその情報がやや不十分な状態で作成さ

表1 ソウル都市図一覧

地図名	発行年	著者・発行人	縮尺	大きさ	所蔵機関
京城付近之図・漢陽京城図	1900		不明	26×34.7cm	ソウル歴史博物館
韓国京城全図	1903	京釜鉄道株式会社	1:10000	97×68cm	国会図書館(日本)ほか
最新京城全図	1907		1:10000	74.8×52.9cm	ソウル歴史博物館ほか
京城	1908	玄公廉ほか	不明		ソウル歴史博物館
京城市街全図 竜山市街全図	1909		1:12000	26×37cm-48×46cm	国会図書館(日本)
京城市街全図	1907-1910		1:8000		国会図書館(日本)
京城市街全図	1910	財藤勝蔵	不明	108.8×115.5cm	ソウル歴史博物館
京城及び龍山	1910	大阪毎日新報社	不明		ソウル歴史博物館
京城龍山市街図	1911	朝鮮駐劄憲兵隊司令部	1:8000		国会図書館(日本)
龍山合併京城市街全図	1911		1:10000	78.2×54.7cm	ソウル歴史博物館
Keijo (Seoul)	1913	The Imperial Japanese Government Railways	1:32000	72.7×32.6cm	ソウル歴史博物館
KEIJO (SEOUL)	1913	Imperial Japanese Government Railways	1:32000		
京城市街疆界図	1914	財藤勝蔵	1:10000	104×73cm	国会図書館(日本)
京城府市街疆界図	1914	財藤勝蔵	1:10000	109.4×77.5cm	ソウル歴史博物館
京城府明細新地図	1914		1:10000	109.5×80cm	ソウル歴史博物館ほか
昌徳宮全図	1915		1:3600	31.9×45.5cm	嶺南大学校博物館
京城府管内図	1917		1:16000	78.4×54.3cm	ソウル歴史博物館
KEIJO	1910年代	朝鮮鉄道ホテル	不明	38×52.6cm	ソウル歴史博物館
KEIJO (SEOUL)	1920	The Department of Railways	1:30000		
京城(「朝鮮交通地図」中)	1924		1:25000		ソウル歴史博物館
京城府水災図	1925		1:10000	54.7×72.6cm	ソウル歴史博物館
京城市街図	1925	小林又七	1:7500	65×93cm	日文研
京城市街図	1927	小林又七	1:7500	100×95.8cm	ソウル歴史博物館
龍山市街図	1927	小林又七	1:7500	100×96cm	ソウル歴史博物館
京城市街全図	1929	大阪十字屋編	1:10000	53×103cm	ソウル市立大博物館
京城市街地図	1929	名産商会	不明	27×39.5cm	ソウル歴史博物館
京城案内図	1929	劉承復	不明	54.2×79.1cm	ソウル歴史博物館
京城市街地図	1929	海市商会	不明	29×44cm	日文研
京城遊覧案内図	1920年代後半		不明	20.3×46.3cm	ソウル歴史博物館
商工案内入京城市街図	1931	京城商工案内社	不明	79×53cm	山口大図書館
京城	1932	朝鮮総督府鉄道局	不明	39×53cm	滋賀大経済学部
京城市街全図	1933	京城観光協会	不明	20×29cm	国会図書館(日本)
京城市街図	1933	小林又七	1:7500	99×98.4cm	ソウル歴史博物館
京城精密地図	1933	白川行晴	1:4000	183×113cm	ソウル歴史博物館
京城府管内図	1934		1:15000	79.5×54.8cm	ソウル歴史博物館
京城:仁川・水原・開城	1935	朝鮮総督府鉄道局	不明	38×53cm	民族学博物館(日本)
地番区画入大京城精図(全13枚)	1936		1:6000	54.2×78.7cm	ソウル歴史博物館
京城市街地計画平面図	1936年以後		1:25000	66.1×85.7cm	ソウル歴史博物館
京城:仁川・水原・開城	1937	朝鮮総督府鉄道局	不明	38×53cm	大分大経済学部
京城府管内図	1930年代後半		1:25000	154.5×80cm	ソウル歴史博物館
京城案内図	1930年代後半	京城観光協会	不明	17.8×35.8cm	ソウル歴史博物館
地番入大京城精密図	1940	白川行晴	1:10000	144.3×76.3cm	ソウル歴史博物館
大京城明細図	1940		1:12000	77.4×54cm	ソウル歴史博物館
朝鮮大博覧会会場鳥瞰図	1940		不明	39×52.3cm	ソウル歴史博物館
大京城明細図	1941		1:24000	39×54.4cm	ソウル市立大博物館
京城案内	1943	飯尾耕平	不明	75.3×54cm	ソウル市立大博物館
京城案内	1943		不明	54.2×75.9cm	ソウル歴史博物館
京城案内	1944		不明	54×75.9cm	ソウル歴史博物館
ソウル案内	1945	尹錫勲	不明	51×38cm	ソウル市立大博物館
大ソウル市街地図	1946		不明	54.5×76cm	ソウル市立大博物館
地番区画入大京城精図	1946		1:6000	37.8×53.6cm	ソウル歴史博物館
ソウル特別市街図	1940年代後半		約1:6000	52.7×73.3cm	ソウル歴史博物館
地番入新洞名入ソウル案内	1946以降		不明	36.8×52.6cm	ソウル歴史博物館

(1900-1950年、ソウル歴史博物館『ソウル地図』、ソウル市立大博物館『地の痕跡 地図の話』、および筆者の調査により作成)

れたのではないと思われる地図も散見される。

一枚もののソウル都市地図ではないため表1には記載していないが、明治期に日本において多く作成された朝鮮全図に、割図としてソウルの簡略な地図が挿入されることがあった。これらは日清戦争前後から登場しはじめているので、ある意味では最も早い時期に描かれたソウルの「近代都市図」と呼べるかもしれない。この種の地図は、一枚ものの地図ではないためもあって、非常に簡略にソウル城内を示すにとどまっており、地図の輪郭や地形図などとの相違点などから推して、明らかに近代的測量による地図ではないと思われる。これらの地図の内容については、後に章を設けて詳述したい。

韓国併合が行われて以降は、日本の敗戦に至るまで、ソウルの都市図、特に一般図の性格を持つ地図は、時期を問わず非常に多く作成された。これらは陸地測量部によって3度にわたって作成された地形図や、併合後はじめられた土地調査の結果を反映して作成されたものと思われる。地図によっては「京城市街全図」(1929年、大阪十字屋編)のように、タイトルの脇に「朝鮮総督府御許可済」と記されたものも存在している(図1)。また、このような地図に地番を入れた「地番区画入大京城精図」(1936年)などもこのようなカテゴリに入るかもしれない。

さらに、朝鮮総督府を通じた日本による支配が進行するにつれて、公的な用途のためのソウル都市図も作成される。「京城府管内図」(1934年、京城府土木課)などのように都市計画や道路改修を示した地図や、「京城市街配水鐵管敷設平面図」(1926年)のようにソウルの水道計画を示した地図はその例である。

このような一般図に類する都市図に対し、各種の観光案内地図が数多く作成されていることも特記すべきだろう。表1にもあるように、1920年前後より、たとえば「京城遊覧案

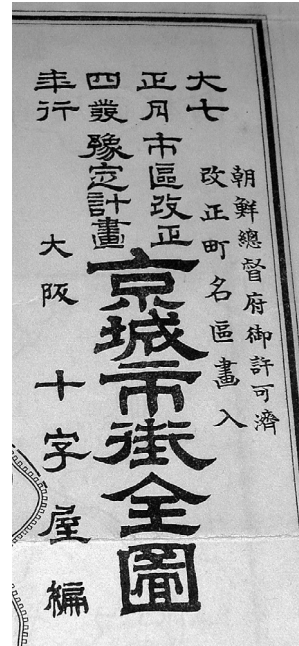


図1 「京城市街全図」部分

内図」などのような、明らかに観光客向けの地図がさまざまな主体によって作成されている。また京城至誠堂作成の「京城案内」などは、同じ地図の情報を更新しながら何度も作成されている。1920年頃までに見られる英語表記の「KEIJO (Seoul)」(1913年、The Imperial Japanese Government Railways) などのような地図も、日本支配下の朝鮮半島を訪問する外国人用観光案内としての側面があっただろう。

ソウルの近代都市図に関しては、おおよそここまで述べたようなバラエティがあるものと思われ、中でも、近代的測量が不十分であった時期から都市図が作成された点や、多様な主体によって一般図に類別される都市図が作成されている点、観光案内図が多くみられる点などは一つの特徴であるかもしれない。

(2) ソウル都市図作成の展開と転換点

次に、ここまで述べた、ソウルにおけるお

およその都市図作成状況をもとに、その系譜、特に韓国併合直後までの都市図作成の流れについて考察を加えておきたい。

上述の朝鮮半島全図の割図として挿入されたソウル都市図は、時期的に最も早いものである。管見の限りでは、この種の地図は1890年代から1910年前後までにあらわれる。その内容はソウルを取り巻いていた城郭を模式的に示し、その城郭に造られた城門が描かれ、城内の街路を簡略に線で示した、いわば略図に近いものであり、情報量もそれほど多くはない。なおこのような描写方法は、実は朝鮮王朝時代に作成されたソウルの古地図である「都城図」に類似している。これらの地図の多くは、日清・日露戦争、および韓国併合に至る頃に、主として日本において民間で作成されたものである。この時期は日本において朝鮮半島に関する関心が高まっており、特に民間では情報が不十分な状態であっても、地図を作製したのではないかと推測される。その際に情報の不足から古地図の情報を用いたのではないかと考えられる。

しかし、ソウル市立大学博物館編『近代地図特別展 地の痕跡、地図の話』などによると、江華島事件および日朝修好条規以降の日本は、ソウル付近の現地踏査と測量を実施し、1880年代に「朝鮮京城図」、「朝鮮京城之略図」と「漢城近方図」を作成したとされる。また1885年には陸軍参謀本部測量課が「漢城近方地図」（「漢城近傍之図」か？）を作成していたとされる⁴⁾。これらは基本的には近代的な測量が行われたものと推察されるが、上記の民間作成の朝鮮全図に挿入された都市図には影響を与えていなかったようである。

1883年の「漢城近傍之図」⁵⁾は、縮尺10万分の1の6枚組の地図であり、地形図に準じた形式を持つ地図である。記入される情報が少なく、おそらくは秘密裏に街道沿いの地物と地形だけを簡単に測量したものを地図化し

たと考えられ、図中の空白部分もかなり多い。李燦は、「朝鮮京城図」、「朝鮮京城之略図」、「漢城近方図」を、日本人が作成した経緯を次のように示す。まず1882年に、ソウルで諜報活動を行っていた水野、松岡などの日本人が、目視による簡単な現地調査によって「朝鮮京城図」を作成した。その後、1883年の壬午軍乱以降、本格的な測量が可能となり、1883年に「朝鮮京城之略図」、「漢城近方図」といったより正確で詳細な地図が作成されたとされる⁶⁾。

同時期に日本陸軍によって作成されたと思われる縮尺1万分の1の「京城之図」⁷⁾を確認すると、ソウル城内の街路のみが描かれており、それほど詳細な地図であるとは言い難いが、朝鮮時代の都城図とは明らかにその輪郭が異なっており、近代的測量が行われたと思われるものであった。おそらくこれが1883年作成の「朝鮮京城之略図」に近い地図であると考えられる。

これらの地図は精度や情報にやや問題があったか、かつ秘密裏に作成されたためか、あまり公にならなかったようである。それに対し1903年に刊行された京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」（1903年、1：10000）は広く知られており、既存の地図のようにソウルの都城を象徴的に楕円形に描く形態から、初めて山麓が正確に表現された、近代的測量の成果がよく反映した本格的な近代地図であると評価されている⁸⁾。この地図では、等高線が用いられ、地物も詳細に描きこまれており、現代の地図と近い体裁である（図2参照）。

嶺南大学校博物館によって作成された『韓国の古地図』において、近代地図の図版解説を行った朴賢洙は、この地図に描かれた内容について、（陸軍）参謀本部と鉄道会社の密接な関係を考慮するならば、参謀本部が日清戦争の頃より推し進めていた大縮尺朝鮮地図製作の結果があらわれたものと見るべきであるとの見解を示している⁹⁾。今後より細かい

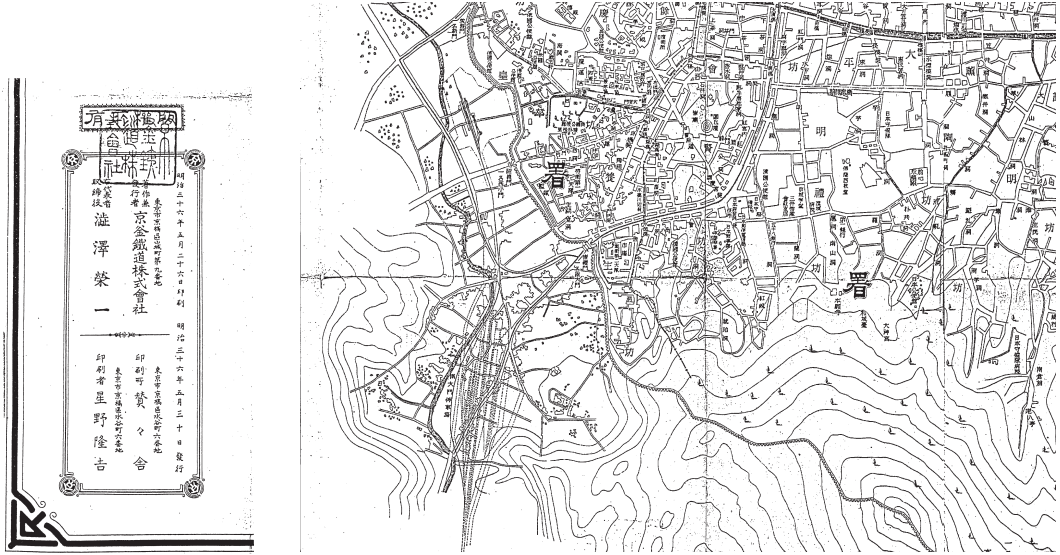


図2 「韓国京城全図」部分（1903年，1：10000，京釜鉄道株式会社）

検証が必要であるだろうが、傾聴に値する見解であると思われる。もしこの見解が正しければ、「韓国京城全図」は、それまで表に出てこなかった、秘密裏に行われた調査の結果があらわれた初めての例と考えられる。

ともあれ、この地図以降ソウルの都市図は近代的測量によるものへ変化したと考えられ、一つの転換点であったと考えられる。このうち、ソウルの都市図は、特別の理由がない限り、縮尺の入った近代的な地図に変貌する。

このようなソウル都市図は、1890年代～1910年代にかけて、略図に近いものから近代的地図形式に転換し、そこに日本の測量や地理情報収集が絡んでいることが理解される。ここでは、近代的測量の成果が都市図に反映しはじめる時期について述べてきたが、近代測量の成果がより不十分な時期にはどのような対応がなされたのであろうか。次章以降最も早い時期に登場したものである、朝鮮全図に割図として載せられたソウル都市図を主題として考察したい。

Ⅲ. 日本における初期朝鮮全図の作成と古地図からの情報

前述のように、初期のソウル都市図は、「韓国京城全図」登場以前には、一枚ものの都市図は公刊されておらず、主として朝鮮全図の一部に割図として掲載されていた。まずここでは、その都市図が掲載されていた朝鮮全図について触れ、どのように地理情報を得て、これら朝鮮全図がいかに変化したのかについて確認、検討していきたい。

古地図を除いて、朝鮮全図として早い時期に作成されたものとして良く知られているのは、1875年11月に作成された陸軍参謀本部作成の「朝鮮全図」である。この年の6月には日朝間での武力衝突事件である江華島事件が起きている。この地図はこのような軍事的接触をうけて陸軍において作成されたものと推測される。

この地図の下部に記された「例言」には、地図作成に関してどのような情報を利用したのかについて述べられている。それによると、「一 此圖ハ 朝鮮八道全圖 大清一統輿

圖 英米國刊行測量海圖 等ヲ參訂シ之ニ加フルニ朝鮮咸鏡道ノ人某氏ニ就キ親シク其地理ヲ諮詢シ疑ヲ質シ謬ヲ正シ以テ製スル所タリ」とされ、朝鮮八道全圖、大清一統輿圖、イギリス、アメリカなどが刊行した海図を参照して作成されていることが示されている(図3)。

「朝鮮八道全図」については、類似した名称の地図が多く、具体的にどの地図を参考としたかは不明であるものの、朝鮮半島全体を描いた朝鮮古地図を用いたものと推測される。「八道全図」というタイトルから考えるならば、時期的には鄭相驥作成の「東国地図」(18世紀末)の写本と考えられる「八道全図」(19世紀)などの利用が推測される。また「大清一統輿圖」は1863年に清の胡林翼が編纂したもので、その内容は清の版図を中心にアジア全体を描いたものである。また当時イギリスなど西洋勢力の作成した海図も使用しており、その影響は図中に水深が示されている点にあらわれている。

このように、この時期には正確な測量の情報が不足しており、近代的測量によらない古地図などを参考としていたことが見て取れる。なお上記の「朝鮮咸鏡道ノ人某氏ニ就キ親シク其地理ヲ諮詢シ」にある「某氏」については、当時日本政府顧問として江華島条約(日朝修交条規)締結に関与した金麟昇であると思われる¹⁰⁾。

「朝鮮全図」のように、陸軍参謀本部のような公的な機関が作成したものだけでなく、民間作成の朝鮮全図もかなり早い時期に作成される。特に日清戦争前後からは多くの朝鮮全図が日本において作成された。上記「朝鮮全図」と同じく近代的測量の成果が十分でない時期に作成されたものも多い。

1873年に作成された「朝鮮国細見全図」(染崎延房編)は、明治期以降日本で作成された朝鮮全図の中で最も早い時期のものと考えられるが、その内容を見ると、朝鮮半島の輪郭や、朝鮮時代の郡縣の所在地を丸で囲んで表記しており、これは朝鮮時代の古地図とよく

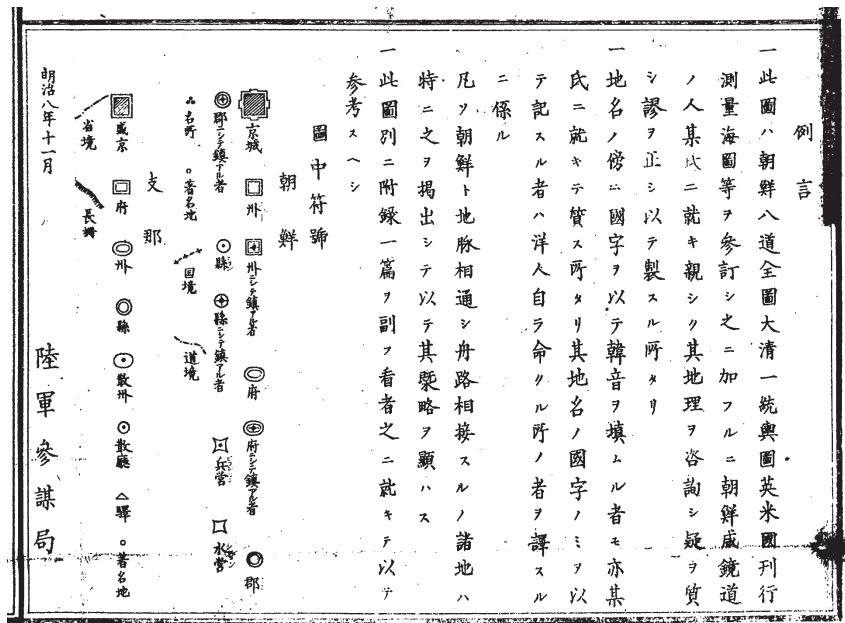


図3 陸軍参謀本部「朝鮮全図」(1875) 例言

類似している（図4）。同様の地図は他にも見ることができ、たとえば、上記の陸軍参謀本部作成の「朝鮮全図」と同じ時期である1875年に、日本で作成された「改訂新鐫朝鮮国全図」（山田孝之助）も、やはり朝鮮時代の朝鮮全図を利用したものと思われる。

やや年代が下ると、これらの地図に比して次第に朝鮮半島の輪郭が正確になるとともに、複数の情報をもとに地図が作成されるようになる。これは陸軍参謀本部作成の「朝鮮全図」と同様の傾向である。1894年に発行された「朝鮮海陸地図」（小橋助入作成）を見ると、「朝鮮国細見全図」などと比べ、朝鮮半島の姿が次第に現在の地図に近づいており、また割図としてソウル、釜山など周辺地域が掲載されている。この地図の凡例には「参考圖目 大東輿地圖 大清一統輿地圖 英米露国刊行測量海圖 著者内地旅行記録地誌之部」とあり、さまざまな資料を参考にしているこ

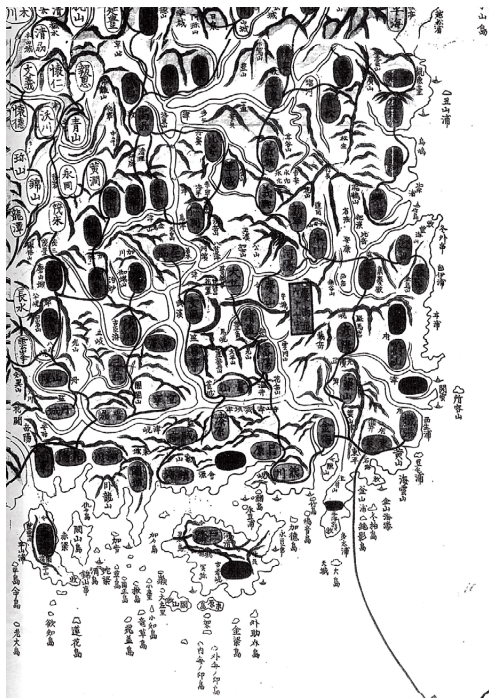


図4 「朝鮮国細見全図」（1873年、染崎延房編）

とが理解される（図5）。

特に「大東輿地図」は、1861年に金正浩が作成したきわめて著名な大縮尺の朝鮮全図である。この地図は近代的測量によるものではないが、方眼を使って作成されたもので、縮尺はおおよそ16万6千分の1である。また木版印刷で、かつ携帯に便利な折畳式の形態をとったことから、当時の古地図としてはかなり普及し、現在日本の図書館や博物館に所蔵されるものもある。韓国では、古地図としてはかなり正確であることから評価が高いが、その独特の山川の表現も大きな特徴である（図6）。

この「大東輿地図」については、これまで韓国において、日本人に利用されたと述べられることがあるが、その裏付けは十分になされていない。そのため、この地図に参考資料として「大東輿地図」が確認された点は重要である。「大東輿地図」は韓国併合後、1936年に京城帝国大学から復刻版が出されるが、この地図の作成はそれよりはるかに以前であり、原版を入手し参考としたものと考えられる。

「解説」には「東史曰朝鮮音潮仙……曰朝鮮山経云 崑崙一枝 行大漢之南東……白頭山為朝鮮山脈之祖山……右 大東輿地圖記文縮為于此」と示されており、「大東輿地図」を編集縮小して作成された「大東輿地全図」に記載された解説文をやや要約しながら記してある。作者が「大東輿地図」と「大東輿地全図」を混同していた可能性もある。この内容のうち、「崑崙一枝」「祖山」などの語は、「大東輿地図」作成の背景となった朝鮮半島の風水や脈の思想に基づく自然観がそのままあらわれたものである。

なお、ここまで日本で作成された朝鮮全図について触れたが、大韓帝国期の朝鮮においても1890年前後より朝鮮全図が作成されている。特に大韓帝国政府において教育行政を担当した学部編輯局によって作成された「大

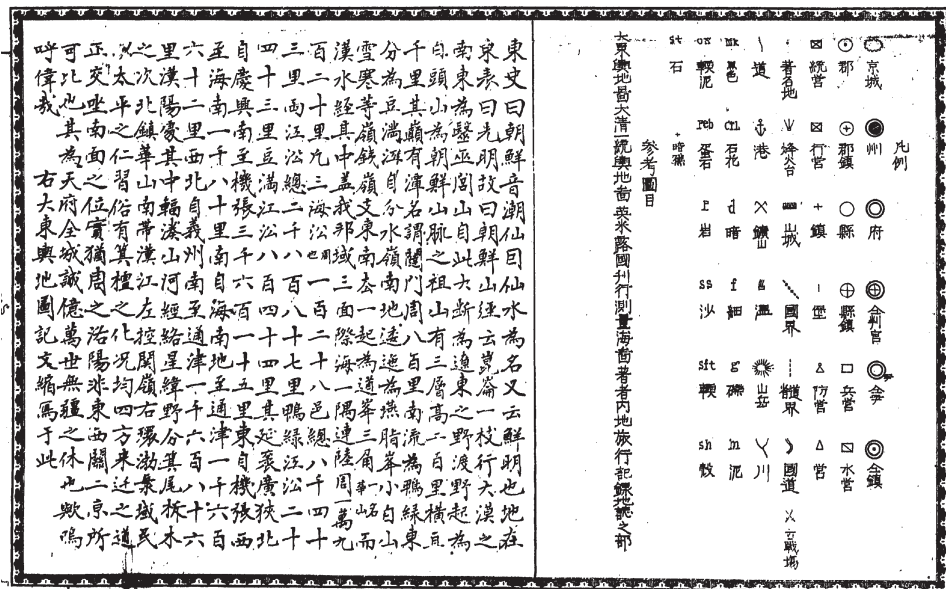


図5 「朝鮮海陸全図」(1894年) 凡例, 参考圖目, 解説

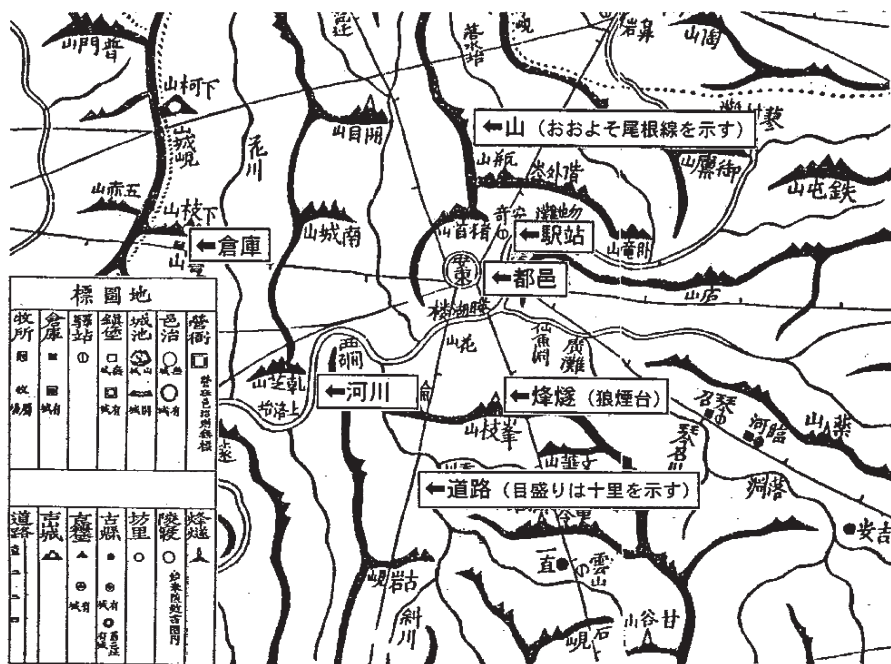


図6 「大東輿地図」(1861年)の地形表現と記号(慶尚道・安東付近)
 (京城帝大版「大東輿地図」1936により作成)

韓輿地図」(1900年頃), 「大韓全図」(1899年), 「大韓帝国地図」(1909年)などの一連の朝鮮全図が著名である。これらの地図の中

でも「大韓輿地図」については, 朝鮮半島の輪郭が「大東輿地図」のものと同様である。この指摘がある¹¹⁾。

ここまで述べたように、特に日本において早い時期に作成された朝鮮全図は、十分な近代測量の成果がなかったため、さまざまな参考資料が使われたものと考えられる。その中で「大東輿地図」などをはじめとした古地図が利用されていた。そして1890年前後からこれらの朝鮮全図には割図として地域の地図が入るようになる。当初はそれら割図の内容は重要な地域の海岸線と水深などの海図から得た情報のみであったが、次第に都市内部を描いた地図が入りはじめていく。

IV. 朝鮮全図に掲載されたソウル地図—初期の都市図とその変化

(1) 朝鮮全図に掲載された初期のソウル都市図

上述のように、日清戦争前後より韓国併合前後に至る時期に、特に日本で作成された一枚ものの民間作成の朝鮮全図には、割図として略式のソウル都市図が掲載されることが多かった。これらの地図は、最も早い時期の

近代都市図といえるが、そのスタイルは朝鮮時代の古地図である都城図に類似するものが多い。これは、おそらく日本において朝鮮半島に関する地理情報の需要や関心の高まりがあるにもかかわらず、正確な地図が存在しないため、朝鮮時代の古地図を利用したのではないかと考えられる。上に述べたように、1880年代には陸軍によるソウル周辺の測量が秘密裏に行われていたとされるが、これが公刊されなかったなどの理由から、少なくとも民間では他に依拠すべき地図がなかったためなのではないかと推察される。この点について、具体的な例に即して、年代を追って考察していきたい。

前掲の「朝鮮海陸地図」（1894年・小橋助人著）や、「朝鮮八道明細図」（1984年・大館金城著）などは民間作成の地図としては比較的早い時期にソウル都市図を掲載している。「朝鮮海陸地図」では、図7に示すような都市図が示され、また「朝鮮八道明細図」では図8のような都市図が掲載されている。これ

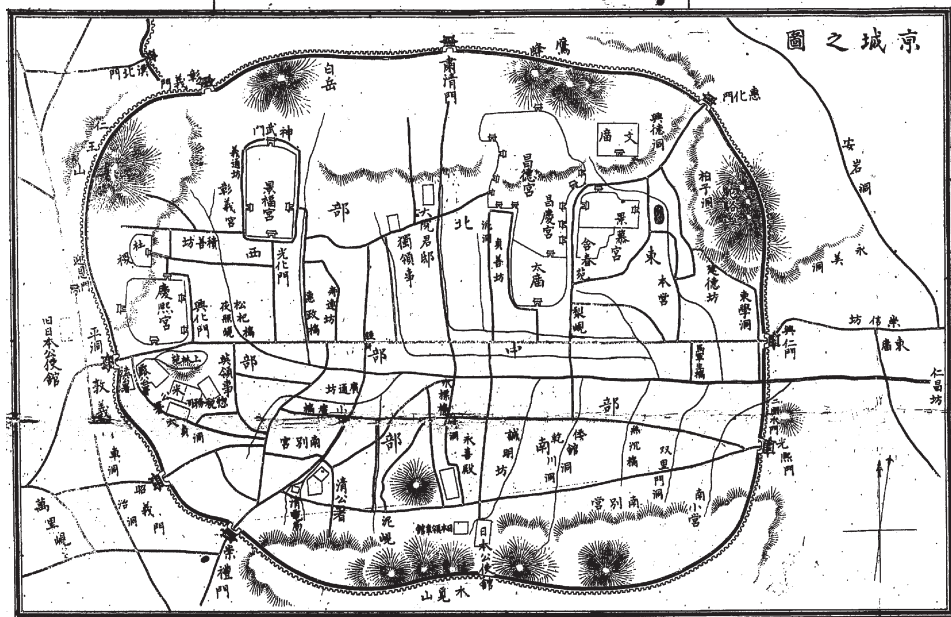


図7 「朝鮮海陸地図」（1894年）中の「京城之圖」

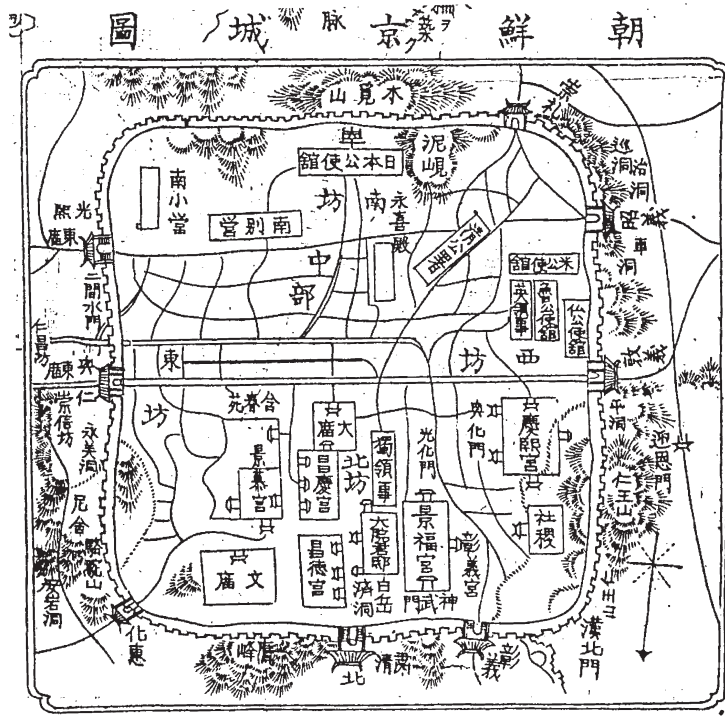


図8 「朝鮮八道明細図」(1894年)中の「朝鮮京城図」

らの図を見ると、当時のソウルが楕円形、あるいは方形に近い楕円形の城壁に囲まれているように感じられる。しかし実際には城壁は楕円形ではなく、東西方向よりは南北方向が長く、また王宮のある小盆地を囲む山々の稜線に沿って城壁を築造したため、北西方向と南方向がふくらんだ形態である。このように実際とは異なる楕円形の城壁を象徴的に描くスタイルは、朝鮮時代に多くみられる都城図のスタイルにきわめて類似している。これは日本において作成された地図だけでなく、大韓帝国政府の機関が作成したものにも見られ、「大韓輿地図」(1900年頃・大韓帝国学部編輯局)などに掲載されたソウル地図も同様の形態である。

この種の都城図に類似するソウル都市図の由来について、現在知られている情報から類推すると以下のとおりである。まずこれらの都市図を詳細に確認すると、共通する特徴を

持つものが見られる。その特徴としては、①城郭が東西に長い楕円形で描かれている点、②朝鮮時代のものほとんど同じ地名が記されている点、③王宮の表現方法が類似している点などが挙げられる。これらの特徴については上述の古地図、「大東輿地図」第一層に掲載された「都城図」ときわめて類似している(図9)。特に地名に関しては、「大東輿地図」の「都城図」にあらわれたほとんどの地名が、そのまま用いられている。

たとえば図10は、1905年発行の「最新韓国全図」に掲載された「京城市街全図」である。この地図には、城内の王宮などの施設名、あるいは「洞」「坊」などがつく地名が記されているが、これは「大東輿地図」の「都城図」のものがほぼそのまま使われている。また景福宮、昌徳宮など王宮の描かれ方も非常によく似ている。逆に城郭を取り巻く山々の表現などは「大東輿地図」の「都城



図9 「大東輿地図」(1861年)中の「都城図」(京城帝大版「大東輿地図」, 1936複製)

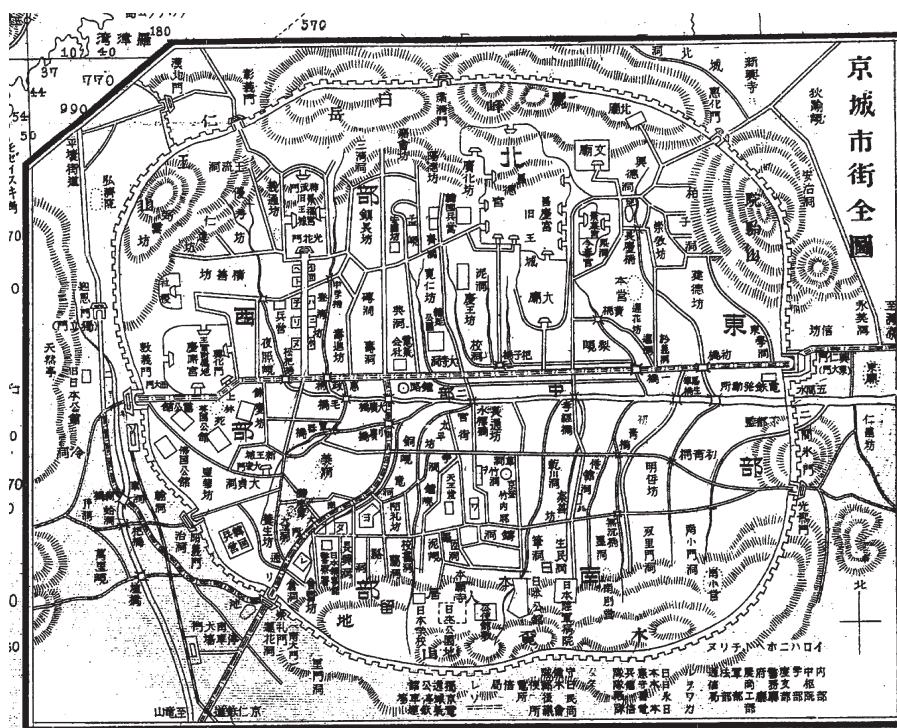


図10 「最新韓国地図」(1905年)中の「京城市街全圖」

図」とは異なっている。

図11は、ソウル城内東部について「大東輿地図」中の「都城図」（1861年）と「最新韓国全図」中の「京城市街全図」（1905年）を対比したものである。この両者を見ると、「都城図」の下半部の地名が逆さに記されていて見にくいですが、40年以上の時間的経過があるにもかかわらず、両者の地名がほとんど同じであることが理解される。また上述の山の表現の違いもよく把握できる。

ところで、李燦によれば、19世紀末に作成された朝鮮古地図集である「鰈城地図」の一部に「大東輿地図」の「都城図」と内容が同じで、山の表現方法だけがケバ式で表現された「漢陽京城図」が含まれている¹²⁾。この「漢陽京城図」は「鰈城地図」以外にも見る

ことができ、上記の「京城市街全図」をはじめとしたソウル都市図と「大東輿地図」都城図をつなぐ地図であると考えられる。事実、大韓帝国政府学部編輯局作成の「大韓輿地図」にはほぼ同内容の「漢陽京城図」が掲載されている。またこの「漢陽京城図」には新旧の日本公使館の位置が描かれ、その後の地図にも踏襲された。

さらに、この種の地図で最も早く作られたものと考えられる、日本で発行された「朝鮮輿地図」（1884年）がある。この地図にもやはり都城図に由来すると考えられるソウルの都市図が掲載されているが、城内を描いた「京城」と城外を中心に描いた「京城接近之地」の二つの地図に分けられている（図12）。ソウルを描く際にこのように縮尺の異

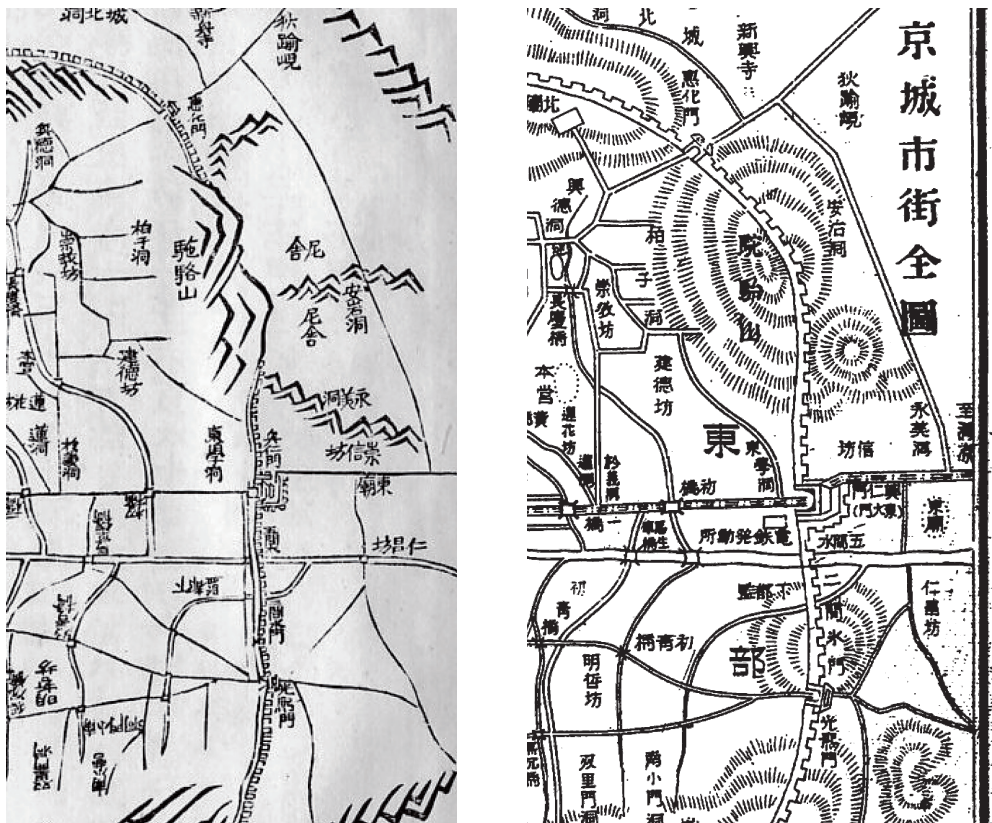


図11 都城図（1861年・左）と「京城市街全図」（1905年・右）の比較

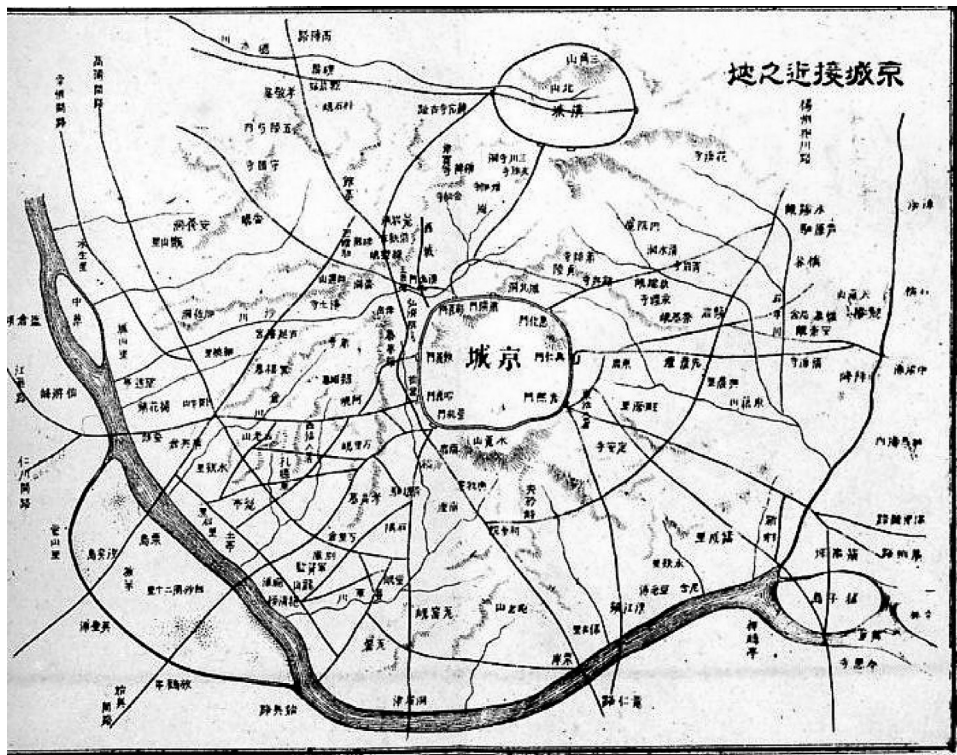
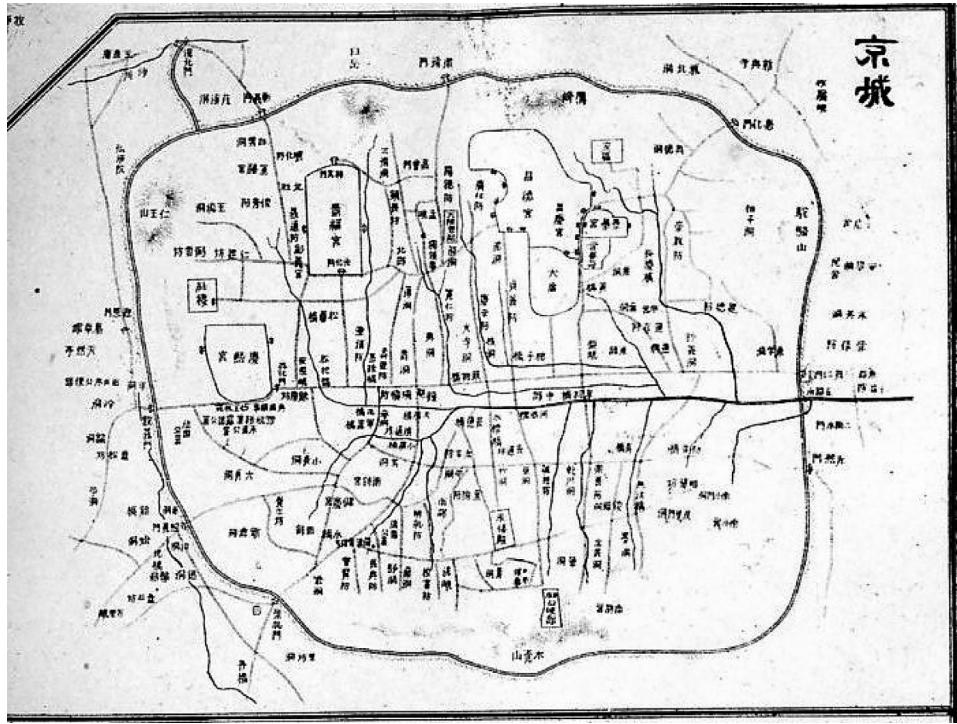


図12 「朝鮮輿地図」(1884年)中の「京城」と「京城接近之地」
 (嶺南大学校博物館『韓国の古地図 図版篇』1998より)

なる二つの地図でソウル城内と城外に分けて表現する方法は、これも「大東輿地図」など金正浩の作成した地図で採用されたものであり、それを踏襲しているものと思われる。

「大東輿地図」においては「都城図」と「京兆五部」の二つの地図が掲載されたが、「朝鮮輿地図」に描かれたソウル地図と対比すると、それぞれ「京城」は「都城図」、「京城接近之地」は「京兆五部」とほぼ同内容である。ただし山の表現は上述の「漢陽京城図」のようにケバ式の表現を利用している。

李燦によると、この地図は壬午軍乱（1883年）の際に日本に渡った開化派の政治家、金玉均（1851-1894年）が持参した地図を参考に作られたもので、原図が朝鮮から持ち込まれたとされる¹³⁾。そのような意味でやや特別な出自を持った地図といえる。この際に「大東輿地図」の系譜をひく都城図起源の都市図のスタイルが朝鮮側から持ち込まれ、日本で発行される民間作成の朝鮮全図に用いられるようになったのではないかと推測される。

このように初期のソウル都市図の中には「大東輿地図」都城図の系譜をひく「漢陽京城図」の影響を強く受けたものが見られ、朝鮮全図と同じく、古地図を利用した「近代都市図」が存在したことが理解される。

(2) 韓国併合までのソウル都市図の変化

ここまで述べたような由来を持つ、「都城図」の系譜をひくソウル都市図はおおよそ1890年代より1910年の韓国併合の時期まで見ることができる。そしてその後第2章で触れたような一枚もののソウル都市図にとって代わられていくが、その経緯について今少し検討を加えておきたい。

1875年の陸軍参謀本部「朝鮮全図」には、重要な地域について割図で掲載されているが、それらは海岸線と水深だけが示されており、地域や都市の地図とは呼びがたい。その

後、管見の限りでは、1880年代から都城図の流れをくむソウル都市図が朝鮮全図に掲載され始め、1910年の韓国併合前後までには徐々に測量をされたと思しい「近代的」ソウル地図図に変わっていく。その契機は、前述の京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」（1903年）などの発行によるものと推察される。

図10に示した「最新韓国地図」中の「京城市街全図」などにおいては、都城図に近い城郭の形態や、朝鮮時代から続く地名はそのまま、地図上に新しい情報が書き加えられていく。地図を詳細に確認すると、基礎となった「都城図」や「漢陽京城図」には掲載されていなかった、日本領事館をはじめとして、イギリス、フランス、ロシアの公館、「内部」[中枢院]など大韓帝国政府関連機関、病院、発電所、公園など、この時期までに設けられた地物が書き加えられている。

これ以外の地図においても、同様の傾向がみられ、古地図由来の都城図に新たな情報を書き加えて利用するという方法がとられている。管見の限りこの1905年発行の「最新韓国地図」中の「京城市街全図」はこの種の地図としては最も遅く発行されたものであり、さまざまな新しい情報が蓄積・記入され、ある意味でこの種のソウル都市図の完成形態といえるかもしれない。これは上述の京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」が発行された後も、一部の地図で継承される。

この時期には朝鮮全図ではなく、中国を含むより広い東アジア地域を示した地図も発行され、やはり各地域の都市図が割図で掲載されている。その中にはソウル（京城）の地図が掲載されているが、上記のように都城図を基礎として使用しているためか、他の都市図、たとえば北京の都市図などと比較すると、やや簡略であるように感じられる。たとえば、図13の「日清韓実測地図」（1894年、松本徳太郎編）では、その形態や精度に差があるように思われる。

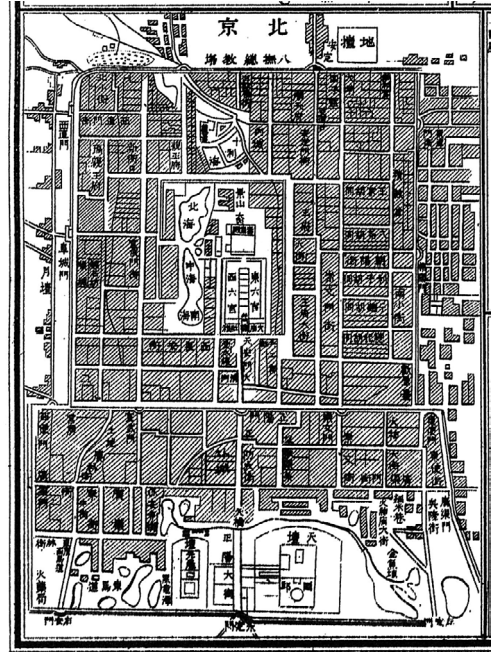
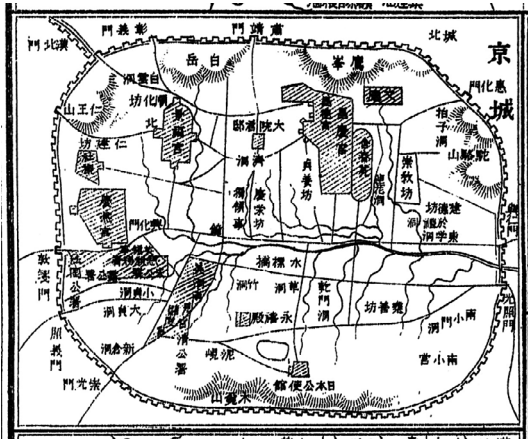


図13 「日清韓実測地図」(1894年)中の「京城」(左),「北京」(右)

その後、図14に示した「韓国新地図」(1907年、地理研究会)や、「朝鮮及満州大地図」(1910年、大修館編集部)などにおいては、ここまで検討してきた都城図由来と思われる都市図の代わりに測量を経たと思われる形態の地図が登場する。これは京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」などと近い形態であり、また現在の地図にみられるソウルの形態に近い。

V. おわりに

本稿では、旧韓末から植民地時代に至るソウルの都市図についてその全体像を探った上で、特に早い時期に作成された民間作成の朝鮮全図に掲載されたソウル都市図に着目し、その変化に関する検討を行い、それらの地図にいかなる情報が反映されてきたかについて考察してきた。

その結果、第一には、以下に示すようなソウル都市図作成のおおまかな流れが把握でき

たものとする。すなわち、韓国併合以前は情報が少ないためか、旧韓末から1900年代までは朝鮮全図の割図として掲載される簡略な都市図が中心であった。しかし、1903年の京釜鉄道株式会社による「韓国京城全図」を契機として、徐々に近代的測量を経た縮尺入りのソウル都市図が作成されるようになる。この後、観光案内図など特別な用途のものを含む多種多様な都市図が作成された。なお、初期の近代測量によるソウル都市図には、1880年代より日本の手によって行われてきた測量の結果が反映されている可能性がある。

第二に、やや短い期間ではあるものの、古地図からの情報が日本で作製された近代都市図に利用した時期が存在したことが理解できた。主として楕円形の城壁など基本的な形態や、王宮・街路などの基礎的な情報が継続して利用され、それに新たな情報が盛り込まれていった。この時期は近代的測量の黎明期でもあり、日本人にとって朝鮮半島、ソウルの



52

図14 「韓国新地図」(1907年)中の「京城」

情報が非常に薄い時代であったと考えられる。その際、何らかの理由で情報が不足する場合に古地図を援用したと考えられる。またこのことは近代的測量を基礎におかない「近代都市図」が存在し、いわば「時代は近代、地図は近世」とも言うべき、近世と近代の隙間の時期があったことを示している。

第三に、早い時期のソウル都市図には「大東輿地図」の「都城図」や、それを修正した「漢陽京城図」系統の朝鮮時代の古地図が姿を変えてあらわれており、朝鮮全図にも援用された「大東輿地図」は、朝鮮時代最高の古地図との評価のとおり、日本人作成の近代都市図にも影響を及ぼしていたことが把握できた。これまでも韓国において「大東輿地図」が日本人にも評価され、植民地支配に利用され

た」などの話が残されているが、その根拠となる事例を示すことができたと思う。この点で、「大東輿地図」の影響力については改めて評価されるべきではないだろうか。

なお、前述のように、初期の都城図に近いソウル都市図が作成された時期には、日本陸軍の測量によるものと思われる地図が存在し、その後のソウル都市図に影響を及ぼしたものと推測される。しかし本稿においては、日本陸軍作成の地図が、どの時期にどのように民間の都市図に影響を及ぼしたかについては、資料の不足から十分に明らかにできなかった。

また、今回本稿の資料とした地図類、特に民間作成の都市図は、ある程度整理が進んでいるソウルのものであっても、まだ全体像を

把握しきれていない可能性がある。今後ともその全体像を把握していくべきであると考え。これら二点についてはあわせて今後の課題としたい。

(中部大学国際関係学部)

〔謝辞〕

本研究には、平成19-21年度文部科学省科学研究費補助金「東アジア世界の近代都市地図集成とその比較地図史的研究」(基盤研究B, 研究代表者: 神戸大学人文学研究科教授・長谷川孝治, 課題番号: 19320131) の一部を使用した。

なお、資料の収集・閲覧においては、ソウル市立大学博物館の担当者の方々に協力をいただくとともに、韓国・誠信女子大学校楊普景教授にご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

〔注〕

- 1) 後述のソウル歴史博物館, ソウル市立大博物館などでは、所蔵するソウル近代都市図を用いた図録作成や特別展を実施しており、これらの地図に関する解題が作成されている。また1990年代に刊行された古地図集にも、近代地図の一部として都市図に関して言及したものがあつた。
- 2) ソウル市立大学博物館『近代地図特別展地の痕跡, 地図の話』(韓文), 2004
- 3) ソウル歴史博物館『ソウル地図』(韓文), 2006
- 4) 前掲2) 144頁。
- 5) 国会図書館憲政資料室所蔵。
- 6) 李燦・楊普景『ソウルの古地図』(韓文), 1995, 133頁。
- 7) 国会図書館憲政資料室所蔵。
- 8) 前掲2) 144頁。
- 9) 嶺南大学校博物館『韓国の古地図』(韓文), 1996, 196頁。
- 10) 南 榮佑「韓国における外邦図(軍用秘図)の意義と学術的価値」, 2006, 外邦図研究ニュースレターNo.4, 92頁。
- 11) 李燦(山田正浩・佐々木史郎・渋谷鎮明訳)『韓国の古地図』, 汎友社, 2005, 545頁。
- 12) 前掲3) 149頁。
- 13) 前掲6) 149頁。